

近いところの太陽風の観測は不可能である。これを可能にするためには観測周波数をもっと高いところへ上げなくてはならない。そこでマイクロ波帯におけるが如く数太陽半径の場所を流れる太陽風の観測は出来ないにしても 300 MHz 以上の UHF 帯であればアンテナも現実的な費用で建設可能であり、しかも太陽から約 0.1 天文単位あたりの太陽風の観測は可能である、という見地に立って装置の建設に取掛かったところである。アンテナは表紙の図に示したような外観を持つ東西 100 m、南北 20 m のシリンドーパラボラアンテナで、豊川、富士嶺、菅平の 3 地点に同一のものを建設する予定である。観測周波数は 330 MHz 近辺を考えている。これによる観測と現行の VHF 帯における観測とを組み合わせると太陽から計って 0.1 天文単位から約 1.1 天文単位までを流れる太陽風の観測を総合的に行うことが可能となる。太陽風の加速の過程や高速ストリームの進化、ショック波の伝播の様子等について詳細なデータが得られる事が期待される。

## 6. おわりに

1969 年より始めたシンチレーション観測も、観測点が二点三点と増えた上、富士・菅平共アンテナの位置が二転するなど七転八倒の忙がしきで今に至っている。観測装

置も段々と進歩し移相器を何百個も作って電波源を追尾したり、データもその日のうちに電話回線を使って豊川に送るシステムも完成に近づきつつある。これに建設中の UHF アンテナが加わるとなるとシンチレーション観測も今や最盛期を迎えた感がある。しかし何しろ space physics というのは進歩が速いので今太陽活動サイクルがこの観測の正念場となるう。

最後にこの一文を草する機会を与えられた事を奇貨として、観測遂行に多大の御協力をいただいた富士豊茂開拓農協の皆様、東京教育大（現筑波大）菅平高原生物実験所の皆様、電気通信大学芳野研究室の皆様、そして現在観測テープ交換やら何やらで御世話になっている菅平の竹村十郎氏、富士嶺の山口経宣氏に厚く御礼申し上げます。

## お知らせ

### 日本学術会議第 11 期会員選挙について

このことについては、本誌 1977 年 2 月号で既にお知らせ致しましたが、今後の選挙行事予定は下記の通りになっておりますので、関係者は御留意下さい。

10 月中旬 投票用紙、選挙公報等の発送

11 月 25 日 選挙期日（投票の締切）

11 月 27 日～12 月 1 日 開票

12 月 1 日 当選人の決定とその告知

12 月上旬 当選人氏名の官報公示

なお、詳細は学会又は各研究機関へお問い合わせ下さい。

わが国唯一の天体観測雑誌

# 天文ガイド

定価240円(〒45円) 77-12月号・11月5日発売!

## ●12月号おもな内容

★来年はどんな天文現象があるだろうか? 1978年の天文現象は藤井旭さんの解説です。皆既月食や金星食もあり、にぎやかな年になりそうです。

★この冬の流星群の条件は? ふたご群とりゅう座群の観測ガイドは藪保男さん。

★太陽がいよいよ活動期に入ってきたようです。太陽の活動にも注意しましょう。スペクトロ・ヘリオスコープの紹介は大西俊夫さんです。

★ポジフィルムから直接すばらしいカラー写真が焼きつけられます。どのようにやって? どのような装置で?

# 103aによる 散光星雲

オリオン大星雲に大表される、淡く美しい星雲の写真集です。天体写真専用のコダック103aフィルムを使ったため、今までにない写真が撮れました。

1つの星雲につき標準レンズから望遠レンズまで色々な大きさで見せ、形の変化を楽しませてくれます。

また、各所にそう入されている星図を利用して、読者も写真を撮ることができます。

●井田三良他著/B6判・120ページ・700円発売中

誠堂新光社 東京都千代田区神田錦町1-5

振替東京7-6294 電話03(292)1211